

クンダリニー・ヨーガ修習 —クンダリニー覚醒法—

瀧 藤 尊 照

〈はじめに〉

クンダリニー *kuṇḍalinī*についてはエリアーデ著作集・第十卷「ヨーガ2」¹⁾の中で、以下の様に解説されている。

ヒンドゥの伝統によれば、七つの重要なチャクラがあるが、それらを幾人かの権威者たちは六つの叢と前額縫合線のことであると述べている。ムーラーダーラ (*mūlādhāra*、ムーラ=根)は脊髄の基部にあり、肛門と生殖器官との間(仙骨および尾骶骨の叢)にある。それは四弁の赤い蓮華の形をしており、その上に金色でv、ṣ、ś、sの文字が刻まれている。その蓮華の中央には黄色い四角形、つまり地 (*pr̥thivī*)の要素の表象があり、その四角形の中央には頂点を下にした三角形、ヨーニ(陰部)のシンボルがあり、カーマルーパ *Kāmarūpa*と呼ばれる。その三角形の中央にはスヴァヤムブー・リング*svayambhū-liṅga*があり、その頭部は宝石のように輝いている。そのまわりを(蛇のように)八回巻いて稲妻の如く輝きながらクンダリニー *kuṇḍalinī*が眠っている。彼女の口(あるいは頭)でリングの開口を妨げながら。このようにしてクンダリニーは「ブラフマンの門」(*brahmadvāra*)とスシュムナーへの入り口を塞ぐのである。

但し、上述の「蛇のように八回巻いて」のところは、左保田氏の「続・ヨーガ根本経典」では「三巻き半のとぐろを巻いている」となっている²⁾。

更に別の箇所では、

クンダリニー (*kuṇḍalinī*)の幾つかの側面はすでに述べた。それは、同時に蛇、女神、「エネルギー」の形をしていると言われる。「ハタヨーガブラディーピカ」(Ⅲ,9)はクンダリニーを次のように述べている。すなわち、『曲がった身体を有するもの』(クティラーンギー) *Kuṭilāṅgī*、クンダリニー、「雌の蛇」(ブジャーンギー) *Bhujāṅgī*、シャクティー、イーシュヴァリー *Īśvari*、クンダリニー *kuṇḍalinī*、アルンダティー *Arundhatī*—これらの語はすべて同義語だ。扉が鍵によって開けられるように、ヨーガ行者は解説(ムクティ)*mukti*の扉を、ハタ・ヨーガを用いてクンダリニーを開くことによって開く。この眠る女神が師(グル)の恩寵によって目覚めるとき、すべてのチャクラは速やかに貫かれる。『語のすがたをした梵*Śabdabrahman*』、すなわち、音節OMと一体となって、クンダリニーはすべての男根とすべての女神のあらゆる属性を得る。蛇のすがたを取って、クンダリニーはすべての生きものの身体を中心点*dehamadhyayā*に住んでいる。バラシャクティ *Paraśakti* (最高シャクティ)のすがたを取って、クンダリニーは胴体*ādhāra*の座に現れる。それは、諸々の脈(ナー

ディー)の基点となる、胴体の中心にある結び目の中央に住む。クンダリニーは、息で内官manasの中に起こった力によってスシュムナー脈の中を動き『針が糸を引くように、スシュムナーを通して上方に引き上げられる』。クンダリニーは坐法(アーサナ)と止息(クンパカ)によって目ざめさせられる。そうすると、息は空(シューニャ)の中に吸収される。』と記されている³⁾。

クンダリニーの呼び名は、シャクティ、イーシュヴァリー、クンダリニー、アルンダティー、チャンダーリーなどと多義に渡っているがすべて同義語である。「火」、「炎」、「蛇」と共通した内容を持ち、クンダリニーの意味は「炎の蛇」の日本語訳となる。もともとkuṇḍaは壺、瓶、圓形の孔、圓き火坑、器など、kuṇḍalaは一卷き、腕環など、kuṇḍalinは環状をなせる、巻かれたる、蛇など、kuṇḍalīは軍荼利などの意味である⁴⁾。

〈クンダリニーの通り道〉

クンダリニーは、息で内官(manas=広い意味における知的作用ならびに情緒のよりどころとしての心。その他、意識、思惟、観、念)の中に起こった力(瞑想meditationによって起こる力)によってスシュムナー suṣūmṇā(中央の脈管・青色。頸動脈という意味もあり、非常に重要な脈管)の脈管(nāḍī=身体内の管状の器官、空茎)の中を動き、スシュムナーを通過して上方(頭頂)に引き上げられるということである。身体dehaのスシュムナーを通じて上方に引き上げられる力siddhi(エネルギー energy=潜在動力)は坐法āsana(アーサナ)と止息kumbhaka[クンパカ:調息法prāṇāyāma(プラーナーヤーマ)]を修習abhyāsaすることで目ざめさせられる(覚醒awakening)と述べている。この「坐法」と「止息」は、時には苦行tapasとなるが、もう一つの重要な真言乗mantrayāna(マントラヤーナ)を合わせて、クンダリニー上昇のための最上の行agrācaryaと捉えて修習するべきである。

クンダリニーの通り道であるスシュムナー管は、通常身体bodyの脊髄管vertebral canal(すべての椎骨vertebraの椎孔vertebral foramenを寄せ集めた集合体)に対応するものと考えられる。

〈クンダリニーの性格〉

覚醒したクンダリニーの性格は一体どの様なものか、興味深いところである。エリアーデの記述によると、

クンダリニーが目ざめると非常に熱が生じそれが諸々のチャクラを通じて広がっていくことは、下半身が死体のように鈍く冷たくなる一方、クンダリニーが通っていく場所は熱く燃えているのでそれとわかる。仏教のタントリストたちは、火のようなクンダリニーの性格を更に強調する。仏教徒によれば、シャクティ(チャンダーリー Caṇḍālī、ドームビー Ḍombī、ヨーギニー Yoginī、ナイルアートマー Nairātmā等とも呼ばれる)は応身(nirmāṇa-kāya、臍の領域)の中に眠っている。

始動をし始めたクンダリニーは熱を生じ、あるいは下半身が死体の様に冷たくも感じ広がっていくと述べられているが、クンダリニーはイダー iḍā(月の脈管)、又はピンガラー piṅgalā(太陽の脈管)を通して上方へと引き上げられる性質を有するものであるから、時には熱く燃える

様に、時には氷の様に冷たく感じるものであって、その感覚は脊柱管に沿って感じるものである。

ヒンドゥーイズムHinduismの伝統ではクンダリニーとは女神であって、「炎の蛇」の象徴として具現化することで密教的性格を位置づけている。ヨーガ修習abhyāsaを行うことで窮極的解放muktiおよび秘術的力siddhiを得ようとするが、そのためにはクンダリニーの覚醒（活動）が必要であり、それにより並はずれたヨーガの力yoga-balaを得ることが可能であるとしている⁵⁾。

タントラTantra〔織機（ハタ）〕、経（タテイト）、基礎、教義、呪文、呪法的にして且つ神秘的なる經典、醫術、妙薬、教法、秘密本續、秘呪本續、不易の聖典などの意味〕はインドの信仰体系の一つと考えられている。とくに後期密教での聖典は一般に『タントラ』と呼ばれているが、ヒンドゥー教、仏教Buddhismなどの宗派ではタントラ的な理念を共有し、その行事を実践することで、ほとんどの人々が通常は『もろもろの尽力』と『気晴らし』によって無意味に浪費してしまうことになるヒトの身体内と精神世界に潜在する或る種のエネルギーを引き出そうとするのである。タントラの実践で重要なことは、一般に人々が世俗の快楽と捉えてしまっている概念を避けることなく、その危険性を十分に熟知した上で、むしろ積極的に取り入れようとするところにある。フィリップ・ローソンの論説では、タントラの伝統では女性的原理であるシャクティ śakti（～を成し得る能力、力、強さ、Śiva神の活動力または女性的性力）を簡単なマンダラmaṇḍala（輪、円、円満輪、全体、総体、曼荼羅、界）のヤントラyantra（保持する手段、支枝、防さく、器具、装置、機械のしかけ、推進具、革の紐）として象徴的に表現することによってそれを瞑想し、各人の記憶の蓄積と心的反応を目覚めさせることが重要であって、それを純粋なエネルギーの状態に還元することができる様にあらゆる機能—感覚・情緒・知能—を鼓舞するべきであるとしている。

純粋なエネルギーであるクンダリニーについては、イメージの博物誌である「タントラ」の中で、

いちばん下の、はなびらが四枚ある蓮花は、骨盤の基底部、肛門のすぐ前の会陰部にある。ヒンドゥー教のタントラは、この蓮華に大きな関心をもっている。何故なら、それはそこに、それぞれの人達自身の女神であり、世界を噴出する機関でもある、微細な蛇、クンダリニーを住まわせているからである。

クンダリニーは、体内のリングムの周りに蝮局を巻き、そのリングムの口を自分の口でくわえたまま眠っている。内なるリングムの口は、スシュムナー基底部の末端であり、彼女のとぐろは世界体験が発言する根源なのである。

この最下層の蓮花の輪の中に、自分の世界の円盤をしつらえたタントラ信奉者は、ヨーガ的・性的な姿勢をとり圧力を加えることによって、クンダリニーを「目覚め」させる。クンダリニーはとぐろを真っ直ぐに伸ばし、上昇を開始するために、スシュムナーの基底部の末端に穴をあける。

そのときの最初に受ける感覚は、激烈であり、まったく名状しがたいものである。それから、クンダリニーはタントラ信奉者が精神を諸々の蓮の一つの構造と意義に集中するにつれて、一つ一つのより上層にある蓮の中に、順繰りに進入する。

ヒンドゥー教のタントラ信奉者の狙いは、かれのクンダリニーを出来るだけ頻繁にスシュムナーに上昇させ、終いには事実上恒久的に昇ったままにすることである。

仏教のタントラ信奉者は、仏教の立場からあまりにも露骨で面白すぎる感覚的な心象を描くことを拒むが、それにも関わらず彼もまた自分の脊髓を上昇する「内なる少女」を思い描く。彼女は、仏教的タントラ美術に於いては、『赤いダーキニー』などの、女性の像として表現されている。

ヒンドゥー教と仏教の双方の流儀は、頂上に近いところで、如何に女性的エネルギーが存在する男性的種子と巡り会い、性的に結合しているかを叙述する。

と解説されている⁶⁾。

〈タントラ美術〉

仏教的タントラ美術における「赤いダーキニー」の女性神として表現されている。ダーキニー Dakinīは日本では荼吉尼天として知られている。この女神は人の心の垢を食い尽くす鬼神形を呈し、胎蔵界曼荼羅外院南方の焰摩天の傍に四天衆として侍坐する。また大黒天の眷属夜叉（ヤシャ Yakṣaはインドの神話時代において、人を害する鬼類として生まれ、後に八部衆の一に加えられて、仏法護持の神となる）とも言われる。像容は各種人血骨肉の如きものを喰う態をなす。胎蔵界諸尊の場合は、一つは人間の手と足の肉片を持ち、一つは坏を持ち、一つは坏と刃を持ち他の一鬼は伏臥する。

〈ヒンドゥーイズムとブッディズム〉

ヒンドゥーイズムのタントラとブッディズムのタントラの共通点は、身体チャクラの一番下に位置するムーラダーラ・チャクラ mūlādhāra-cakra (mūla=根、つけ根、基底、下部、底、基礎。Dhara=担う、持つ、保持する、支持する、掴む。Cakra=車輪、輪、円盤、領域。ムーラダーラ・チャクラ=根のチャクラで花卉は4枚あり、会陰の部位 perinal regionに位置する)に住むクンダリニーを目覚めさせようとするところにある。

クンダリニーはチャンダーリー caṇḍālīとも呼ばれている。この呼び名はサンヴァラ系タントラで表現されている。サンヴァラ saṃvaraは9世紀以降ブッディズムの中に後期密教として姿を現した密教体系の一つで、『サンヴァラ』という言葉は『至福』という意味で用いられてきた。サンヴァラ系密教に関する包括的研究としての『サンヴァラ系密教の諸相』⁷⁾が内的な火としてのチャンダーリーについて、一大密教体系の諸側面から詳細に論考している。

修業者は、ララナー脈管とラサナー脈管を通る生命風を制御し、応輪における3本の脈管が互いに接合する箇所生命風を集める。するとあたかも風を送って火を焚くように、その箇所に神秘的で繊細な火が生じる。この火はチャンダーリーあるいは、その他様々な呼ばれ方をするが、その性質としてほぼ共通していることは分別を焼き滅ぼす智慧の火であり、曼荼羅の中央に位置する最高女尊と同一視されるという点である。この火は応輪からアヴァドゥーティー脈管を通して大楽輪へと上昇する。

とし、

内的な火は、荼枳尼の名をとって『チャンダーリー』(caṇḍālī) や『ヴァーラーヒー (vārāhī)』、『マハーマーヤー (mahāmāyā)』、或いは『般若の火』(prajñāgni) や『智慧の火』(jñānāgni, jñāvahni) や『ブラフマンの火』(brahmābni) や『ティラカー (tilakā)』といったように文献により様々な呼ばれ方をするが、いずれも実践者の身体の内外を移動し、現象世界の様々な分別を包み込んで焼き尽くすとされる。

とも論述している⁸⁾。

〈脈管〉

ヒンドゥーイズムやフッディズムのタントラ世界観は、微細身(内観による内的経験として知ることができる)にはプラーナprāṇa(生氣)の流通のためのナーディー nādī(脈管、気道)が多く存在するとし、そのうちの三本の気脈を最も重要なナーディーを位置づけている。中央のスシュムナー suśumṇā(両性合一、火、青黒色、菩提心bodhicitta)を軸として、右側にイダー idā(男性、月、白色、精子)、左側にピンガラー piṅgalā(女性、太陽、赤色、卵子)が並行、または絡みついていると説明している⁹⁾。

サンヴァラ学説の身体論が説く三脈とはアヴァドゥーティー脈 avadhūti、ラサナー rasanā、ララナー lalanāの主要な三脈管を指している。Avadhūtiは駆逐された、払い去られた、移された、斥けられた、などの意味があるが、月と太陽が斥えられ、いずれ本幹のスシュムナーに移されるものと理解出来る。又rasaは汁、精、液、漿の意味で月である男性エネルギーを現し、lalanāは女、妻の意味で太陽である女性エネルギーを現している。アヴァドゥーティーは、身体の中央を垂直に貫く幹の様な脈管であることからヒンドゥーイズム・フッディズムのスシュムナーに相当する。同様に、アヴァドゥーティーの右側に垂直に通るラサナーはイダーに、そして左側に垂直に通るララナーはピンガラーにそれぞれ対応している。

身体内には約72000本の大小の脈管が通っていると考えられているが、その中でもこの三脈管が最も重要なナーディーと言える。

〈クンダリーニーの象徴〉

炎の蛇であるクンダリーニーは、身体内のリングalinga(象徴、生殖器、シヴァ神Śivaの男根、身体の不滅な根源)の周りに蝮局を巻き、そのリングの口を自分の口で咥えたまま眠っている。或いは、自分の尾を噛んでいる(または呑み込んでいる)姿をしたイメージとして象徴される。タントラ修習者はヨーガ的・性的な姿勢をとり、リングに圧力を加えることによってクンダリーニーを目覚めさせようとする。ヨーガ的・性的なポーズとはシヴァ神Śiva(シヴァ神の活動力となる女性的性力で、力、力量、強さ、成し得る能力などの意味)がヨーガyoga(軛をつける、結合、連結、精神の集中、静慮、心統一などの意味)を通して合一した姿を表現している。そこから、合一の結果に生じる強大、且つ無比なエネルギーを利用することで、精神世界における内的な変貌を遂げようとするのである。

〈クンダリーニー覚醒への条件〉

目覚めたクンダリーニーは髑髏を真っ直ぐに伸ばし、脳天の大楽輪mahāsukha-cakra (=サハスラーラ・チャクラsahasrāra-cakra、ブラフマスターナbrahmasthāna、ブラーフマランドラbrāhmarandhraニルヴァーナ・チャクラnirvāṇa-cakra) へと上昇し始める。

ミルチャ・エリアーデはクンダリーニーを呼び起こすためには、クンダリーニーは、息で内官(manas)の中に起こった力によってスシュムナー脈の中を動き、針が糸を引くようにスシュムナー通して上方に引き上げられる。

クンダリーニーは坐法(アーサナ)と止息(クンパカ)によって目覚めさせられる。

そうすると、息は空(シャーニャ)の中に吸収される。

と論説している¹⁰⁾。

クンダリーニーをその眠りから目覚めさせるためには、諸条件の修習の中でもとくに坐法と止息が大切であるとしている。

〈坐法〉

坐法āsanaに関しては、佐保田鶴治氏の著書『続・ヨーガ根本経典』に詳しく論説されている¹¹⁾。

アーサナの総計は生物の数にひとしいが、シヴァ大神は太古に8400万のアーサナを説かれた。その中で、84のアーサナが優れているとされる。この84の中でも、人間社会においては32のアーサナがすばらしい。

32の坐法としては、

- 1、シッダ (Siddha)
- 2、パドマ (Padma)
- 3、バドラ (Bhadra)
- 4、ムクタ (mukta)
- 5、ヴァジラ (Vajra)
- 6、スヴァステイカ (Svastika)
- 7、シンハ (Siṃha)
- 8、ゴームカ (Goumukha)
- 9、ヴィーラ (vīra)
- 10、ダルヌ (Dhanur)
- 11、ムリタ (Mṛta)
- 12、グプタ (Gupta)
- 13、マッチア (Matuya)
- 14、マツチェンドラ (Matsendra)
- 15、ゴーラクシャ (Gorakṣa)
- 16、パシュチモターナ (Paścimottāna)

- 17、ウトカタ (Utkāṣa)
- 18、サンカタ (Saṅkaṣa)
- 19、マユーラ (Mayūra)
- 20、クックタ (Kukkuta)
- 21、クールマ (Kūrma)
- 22、ウッターナ・クールマカ (Uttāna-kūrmaka)
- 23、マンドゥーカ (Maṅḍūka)
- 24、ウッターナ・マンドゥーカ (Uttāna-maṅḍūka)
- 25、ヴァリクシャ (Vṛkṣa)
- 26、ガルダ (Garuḍa)
- 27、ヴァリシャ (Vṛṣa)
- 28、シャラバ (Śalabha)
- 29、マカラ (Makara)
- 30、ウシュトラ (Uṣṭra)
- 31、ブジャンガ (Bhujāṅga)
- 32、ヨーガ・アーサナ (Yoga-āsana)

が上げられる。

ハタ・ヨーガHaṭha-yoga（身体dehaに関するヨーガ。ラージャ・ヨーガRāja-yogaへの高みに導く段階）の修習として32のアーサナを解説しているが、どれも難解なものが多い。それらの中で、とくに物理学的にエネルギーの共振を引き起こすピラミッド形の姿勢を保つ坐法をO.P.JAGGIの解説に従って列挙し分析してみる。

〔シッタ・アーサナ〕（達人の体位）

一方の足のカカトを会陰部にぴったりと押しあて、他方の足のクルブシを性器の上に置き、アゴを胸につけ、不動の姿勢を保ちつつ、五官を制し、眉間を凝視する。

シッタ・アーサナがつくりだす三角形triangleの各頂点が成す角度angleは頭部、右上肢（右上肢と底辺が成形する角度）、左下肢（左上肢と底辺が成形する角度）の順に72°、55°、60°となっている。

〔パドマ・アーサナ〕（蓮華の体位）

左のものの上に右の足を置き、同じく右のものの上に左の足を置き、背後で腕を交差し、両方の手でそれぞれに他方の足の親指をしっかりとつかむ。それから、アゴを胸に押しあてて、鼻頭を凝視すべし。

文中の「背後で…」は「前腹部で…」と解釈する方が適切であろうと思われる。また、「両方の手でそれぞれに他方の足の親指をしっかりとつかむ」の箇所はO.P.JAGGIは手掌を上に向け重ね合わせる手技と解説している。

パドマ・アーサナがつくりだす三角形の各頂点が成す角度は頭部、右上肢、左上肢の順に50°、63°、70°となっている。

[バドマ・アーサナ] (幸福の体位)

両方のカカトをコーガンの下で交差して置き、その足の親指を、背後で交差した手で互い
ちがいにつかんでおいて、ジャーランダラ・バンダ (ノドのしめつけ) を完全にやってから、
鼻頭を凝視すべし。これがバドマ・アーサナ (幸福坐) であって、あらゆる病患を消去する。
バドマ・アーサナがつくりだす三角形の各頂点が成す角度は頭部、右上肢、左上肢の順に47°、
65°、65°となっている。

[スヴァスティカ・アーサナ] (吉祥の体位)

ヨーギ (行者) は双方の足をヒザとフトモモの間にはさみ、上体をまっ直ぐに立てて端坐
する。

スヴァスティカ・アーサナがつくりだす三角形の各頂点での角度は頭部、右上肢、左上肢の
順に55°、65°、67°を示している¹²⁾。

その他には、

- 4、ムクタ・アーサナ (解脱者の体位)
- 7、シンハ・アーサナ (ライオンの体位)
- 8、ゴームカ・アーサナ (牛面の体位)
- 9、ヴィーラ・アーサナ (英雄の体位)
- 12、グプタ・アーサナ (秘護の体位)
- 32、ヨーガ・アーサナ (ヨーガの体位)

32種の坐法の中でも特に、上述の9種が身体ピラミッド形の姿勢を保持する坐法として代表
される。

〈ピラミッド建造物〉

ピラミッド建造物については、

ピラミッドpyramidは石や煉瓦で造られた方錐形建造物の遺跡。特に有名なのはエジプト
のナイル川左岸、カイロ西方のメンフィスにあるもので、約80基現存。前2700～2500年
代に国王・王族などの墓として建造。現存中最大規模は、ギザにあるクフ王のもので、底
辺の一辺230メートル、高さ137メートル。

と説明されている¹³⁾。

〈ピラミッド・パワーと黄金分割〉

吉村作治氏の著書の中で、『ピラミッド・パワー』の実在性が論証されている。具体的な例
として、ピラミッドの中では物が腐りにくく長持ちする効果があると説明している。

ピラミッド内部では、とくに玄室内の湿度が異常に高いにもかかわらず、中に残っていた
猫やネズミなどの死骸が腐らずに脱水し、ミイラ化していた事実 (フランスのアントワー
ヌ・ボビーの発見による) がある¹⁴⁾。

ピラミッド・パワーの発生要因にはある種の条件設定が裏打ちされている。それは、大ピラ
ミッドを構成する建築材料である石材のことである。石材としての石灰岩は遠赤外線を多く含

んでいることと、玄室の花崗岩（赤御影石）は強い磁性を有しているという点である。即ち、大ピラミッドの石材としての石灰岩から放射される遠赤外線が生物の細胞を活性化し、更に花崗岩が生み出す磁力が磁力発生装置としての役割を果たすと言うのである。

一方、大ピラミッド内に長時間居ると、逆に健康が損なわれることもあるという現象も見逃してはならないとも言う。ピラミッド内で一晩過ごした人が翌朝、全く意識の無い状態で救出された例では、とくに玄室の中で数時間経った後、思考能力が低下し幻覚に苛まれ、遂に意識を失ってしまった例もあるという。この事例に関しては、その人の精神状態などその時の健康状態が深く関与していたと思われる。

ピラミッド・パワーが持つ電磁気力が精神活動に及ぼす影響については、すでに1970年代の初め頃に、脳波計を使った実験が行われている。被験者が高さ1.2mのピラミッドの中で瞑想をしたとき、被験者の脳波electro encephalogram (EEG) の変化は、 β 波 (14 ~ 25Hz) が優位となり、精神状態的活動が高まり、逆に被験者が安定し、深い瞑想状態に入ったことを示す結果が得られたという¹⁵⁾。

一方、大ピラミッドの建築学的な神秘性については、『黄金分割の比率』についての論説がある¹⁶⁾。

即ち、古代ギリシャの彫刻の美しさは、黄金比 ϕ の数値を基礎に黄金分割の比率を用いたからだとされる。

黄金分割golden sectionとは一つの線分を外中比に分割することで、 $2:\sqrt{5}+1$ （ほぼ1対1.618）の比率となる。長方針の縦と横との関係など安定した美感を与える比を示す¹⁷⁾。

この比率率は中世の建築にも応用されてきたが、古くは大ピラミッドの構造の傾斜角はこの黄金分割の比率を用いて建造されているという。又、大ピラミッドの傾斜角が45°とか60°という常識的な数値でなく、51° 52' という角度をとっていることから、大ピラミッドの周長を高さの2倍で割ると円周率 π に近い数値が導き出されるとも言える。

更に、大ピラミッドの内部に存在する『王の間』の手前にある『控の間』の長さをキュービットcubit（腕尺：肘から中指の先端までの長さ46 ~ 56cm）の単位とし、 π との積を求めると大ピラミッドの底辺の全周とほぼ一致すると言う¹⁸⁾。

以上のことから大ピラミッド建造物が幾何学的にも優れた叡智を備えていたと言える。

〈タキオン・エネルギー〉

大ピラミッドのパワー・エネルギーの根源が何であるか、と言うことに関しては超科学的なタキオン・エネルギー tachyon energy説も取り出されている。

タキオン説によると、大ピラミッドは光を収束し、その結果、タキオン・エネルギーに変換される。変換されたタキオン・エネルギーが磁気フィールドを産み出し、大ピラミッド内の空間に作用するというのである¹⁹⁾。

タキオンは光速を超える速さをもつ仮想的な粒子particleを捉えている。実際、タキオンという名称はギリシャ語の『急速な』という意味に由来している。しかしながら、タキオンは光速度以上の速度をもつため、通常の因果律を破ることになり、現在までのところ物理的に十分満

足の出来るまでの理論は立証されていない。

〈パワー・プラント〉

ギザGIZAのクフKhufu大ピラミッドは、古代エジプトのテクノロジーの集大成としてのパワー・プラントpower plantに他ならないとする説がある²⁰⁾。

「Energy is the basis of creating electricity that we can utilize, so how can we harness the power of an earthquake? Obviously, today, if that much energy were being drawn from the Earth through the Great Pyramid, tourists would not be parading through it every day. In order for the system to work, the pyramid would need to be mechanically coupled with the Earth and vibrating in sympathy with it. To do this, the system would need to be “primed”—we would need to initiate oscillation of the pyramid before we could tap into the Earth’s oscillation. After the initial priming pulse, though, the pyramid would be coupled with the Earth and could draw off its energy. In effect, the Great Pyramid would feed into the Earth a little energy and receive an enormous amount out of it in return.」

ギザのエネルギー発生装置としてのピラミッドpyramidは地球と対を成す振動子であって(カップルオシレーター)、地球も振動をし続ける限り、ピラミッドは地球からのエネルギーを受け取り共振出来るものとする。

「So let us look at the Great Pyramid and its relationship to the Earth. Some incredible data have been recorded concerning the Great Pyramid that give us a clear insight into the builders’ need to build a precise and close association with our planet. It could be passed off as coincidence that the Great Pyramid is located at the center of Earth’s landmass, but other characteristics of this structure strongly emphasize a close relationship to the Earth that is too significant to be overlooked.」

ギザの大ピラミッドは地球大陸の中心点に位置して建てられている特徴がある。

「In the Great Pyramid, there is evidence that strongly indicates that the ancient Egyptian engineers and designers knew about and utilized the principles of a maser to collect the energy that was being drawn through the pyramid from the Earth and deliver it to the outside. This evidence can be found in the King’s Chamber.」

この偉大なピラミッドについて、古代のエジプトの設計技師や設計者たちはメーザー maser (特殊なマイクロ波を放射する発振装置microwave amplification by stimulated emission of radiation) を利用する原理を熟知し、地球からのエネルギーを活用していたものとする。

「Based on the previous evidence, sound must have been focused into the King’s Chamber to force oscillation of the granite, creating in effect a vibrating mass of thousands of tons of granite. The frequencies inside this chamber, then, would rise above the low frequency of the Earth—through a scale of harmonic steps—to a level that would excite the hydrogen gas to higher energy levels. The King’s Chamber is a technical wonder. It is where Earth’s mechanical energy was converted, or transduced, into usable power. It is a resonant cavity in which sound was focused. Sound roaring through the passageway at the resonant frequency of this chamber—or its harmonic—at sufficient amplitude would drive these granite beams to vibrate in resonance. Sound waves not of the correct frequency would be filtered

in the acoustic filter, more commonly known as the Antechamber.

With the granite beams vibrating at their resonant frequency, the sound energy would be converted through the piezoelectric effect of the siliconquartz crystals embedded in the granite, creating high-frequency radio waves. Ultrasonic radiation would also be generated by this assembly.]

そして王の間はテクニカル的に極めて驚きの空間になっている。そこは、地球の物理学的エネルギーをピラミッド・パワーのエネルギー源に変換する場所として設計されている。特に、王の間は最も共振する空間であって音波はその場所で集束される。音波は通過路を鳴り響いて通過し、十分な振幅amplitude（振動現象で、振動の中心位置から測った変位の最大値。振動の変位の変動の幅の1/2）が生じると花崗岩の放射線と共振するようになる。一方、不適当な音波は王の間の手前にあるアコースティック・フィルターで取り除かれる仕組みになっている。ピラミッドの中で音波が花崗岩の放射線の振動数と共振したとき、音波が花崗岩の中に埋め込められている水晶rock crystalの圧電性特質の（水晶は圧電性を示し、これを用いて水晶振動子がつくられる）影響を受け、高周波high frequencyの電磁波electromagnetic wave（radio wave）が生み出される。

電場electric field（電界）とは電気力electric forceを及ぼすことの出来る空間のことで、又一方、磁力magnetic forceを及ぼすことのできる空間を磁場magnetic fieldと呼ぶ。電場と磁場には、時間的に一定な静的場と時間的に変動し空間の遠方まで伝播する波動場があり、この波動場を電磁場という²¹⁾。

一定の時間で大きさと向きが変化する交流alternating currentの電流や瞬間的に電流が流れてすぐに消える放電electric discharge（蓄積されていた電気エネルギーを失う）などのような変動する電流をきっかけに周囲に電場と磁場が次々と連鎖的に発生しながら進んでいく波のことを電磁波という。

電磁波が通過していく間は、電場は振動するので、電流の向きと大きさも振動する。電子electronなど電気を帯びた粒子particleは電磁波の「振動する磁場」から力を受け取ることから電磁場は電磁気力としてエネルギーを運ぶと言えるのである²²⁾。

パワー・プラントpower plant（エネルギー発生装置）としてのギザの大ピラミッドは電磁気力を発生し、そのエネルギーを蓄えることが出来る。このシステムこそがピラミッド・パワーの驚異そのものなのである。

〈クンダリーニ覚醒の条件〉

アーサナとしての結跏趺坐（蓮華坐）には降魔坐と吉祥坐が知られているが、いずれにしても禅定に於いての坐相は頭部を頂点とし、両膝部と両下腿部が底辺、そして両上肢から成る三角形、即ち身体のピラミッドを形成する姿となる。

身体の胸腔内に位置する心臓heartはピラミッドの王の間King's chamberに、次いで上腹部upper abdomen（臍）は控えの間antechamberに、脾臓spleenあるいは男性生殖器male genital organと女性生殖器female organは王妃の間（Queen's chamber）に、そして直腸rectum・肛門anusは地下の間subterranean chamber（subterranean:洞窟、地下室）にそれぞれ相当すると考えられる。

ヨーガ生理学yogic physiology、或いはヒンドゥ Hinduの伝統によれば身体には7つの重要なチャクラcakraが存在するとしている。4つのチャクラについては、以下の如く説明されている²³⁾。

ムラーダーラ (mūlādhāra、ムーラ=根) は、脊柱の基部にあり、肛門と生殖器官との間(仙骨および尾骶骨の叢)にある。それは四弁の赤い蓮華の形をしており

スヴァーディシュターナ・チャクラ (svādhiṣṭhāna-cakra) は、ジャラマンダラ (jaraṃḍala、その本質はジャラ=水であるから)ともメードラーダ (medhrādhāra、メードラ=男根)とも呼ばれるが、これは男性生殖器官の基部(仙骨叢)に位置している。

マニプーラ maṇipūra、mani=宝石、pura=町あるいはナービシュターナ (nābhi=臍)は、腰部の臍のあたり(上腹部叢)にある。

アナーハタ (anāhata、anāhata-śabdaとは二物体間の接触なくして生ぜしめられた音、つまり神秘的音のことである)、息と個我 (jivātman)の座である心臓の領域。

以上ムラーダーラ・チャクラ、スヴァーディシュターナ・チャクラ、マニプーラ・チャクラ、アナーハタ・チャクラの4つのチャクラが大ピラミッドの4つの空間と同様に振動した時、坐法をとった身体そのものがパワー・プラントとして働き、身体内に電磁気力を発生し蓄えていくのである。

〈大ピラミッドと坐法〉

ギザ大ピラミッドは、偶力振動子として働き地球振動free oscillation of the earth (自由振動free vibration=外力なしに系がその内力によって行う振動で、地球は54分周期の振動を示す)と共振resonanceすることで地球からの多大なエネルギーを得るシステムを有するパワー・プラネットであると言える。

身体もアーサナを修習することで、身体的ピラミッドとなり、あたかも身体と地球がカップル・オシレーターとして作動するが如く、地球からのエネルギーを吸収することが出来る。

更に大ピラミッドの驚異的なシステムとしては、音波が王の間の前にあるアコースティックフィルター(控えの間)を通り、適切な周波数が選ばれ、王の間へと集められる(花崗岩の共振を強めながら)。そこで、地球からの低周波low frequencyはよりエネルギーの高い周波数へと変換されていくシステムになっている。その際、通路(地下の間—王妃の間—控の間—王の間)を通じても共振が伝わり、やがて大ピラミッド全体が共振するようになっていく。この経路を通過することで大ピラミッド内で造り出された電磁気力(パワー・エネルギー)が食品の腐敗の進行を遅らせたり、精神へ何らかの影響を及ぼすことになるかと推論出来る。

一方、アーサナに於いても坐法(身体ピラミッド)の状態で、ある種の真言mantraを唱えた時に発生する音波が各チャクラの経路(=脈管nāḍī)を通じてムラーダーラ・チャクラ、スヴァーディシュターナ・チャクラ、マニプーラ・チャクラ、アナーハタ・チャクラ、及び残りのチャクラをそれぞれ随時共振させ、遂には身体全体が共振し、エネルギーの高まりに至り、パワーが身体内に充満していくことになる。

〈マントラ〉

坐法āsanaの修習を行うと地球とのカップル・オシレーターとして共振することができ、エネルギーを地球から吸収出来るようになるが、そのためには真言乗mantrayānaの秘密が必要となる。ここで、その先駆者として弘法大師・空海の名が上げられる。

空海は平安初期の僧であり、804年に入唐、その翌年805年5月には密教の第七祖とされる青龍寺の恵果阿闍梨を訪れる。そして恵果阿闍梨より胎藏界・金剛界両部の灌頂を受け、更に両部曼荼羅の図画や密教仏具・經典約140部など多くものを授かり、後に請来している。しかし同年末には不幸にも空海に全てを授けた恵果阿闍梨が入滅し、様々な想いを抱きつつ20年の留学予定を2年という短期間で修得し帰国する。

そして806年に空海は無事九州に辿り着き、朝廷への報告として『御請来目録』を奉った。この3年後嵯峨天皇が即位し、天皇との更なる交流と「即身成仏」思想の確立が後に真言宗開祖となり真言密教を国家仏教として定着させる事となる²⁴⁾。

しかしながら空海のこの様な多大な実績も、入唐以前に「虚空藏求聞持法」(非常に短い真言を根気よく唱え続ける行)を修習し、成し得ていた事が大きく反映していたと考える。

虚空藏求聞持法は、勤操という一人の沙門に出会い行法を授かり、この修行にて様々な神秘的体験をした事を24歳の時に著したとされる『三教指帰』の中で、以下の様に述べられている。

愛に一沙門あり、余に虚空藏求聞持の法を呈す。其の経に説く。若し人法に依りて此の真言一百遍を誦すれば、即ち一切の教法の文義暗記することを得んと、大聖の誠言を信じ、…中略…阿国大滝の嶽に臍りよじ、土州室戸の崎に勤念す。谷響きを惜しまず、明星来影す

と伝えられている。虚空藏求聞持法の言う真言とは、「南牟阿迦捨揭羅婆耶庵阿利迦麻利慕利莎縛訶」のことである²⁵⁾。

マントラを誦読し発生する音波がカップル・オシレーターの働きを補助し、身体の中の各チャクラ(通常は7つ存在すると考えられている)と共振することになる。大ピラミッドと照合すれば胸部の領域に位置するアナーハタ・チャクラが最も強く共振すると考えられるが、ハタ・ヨーガhaṭha-yoga(瞑想の一種でもあり、心を下界の対象から内面へと無理に向けさせること)²⁶⁾の視点からは特にマントラからの音波振動と共振するムラダーラ・チャクラ関連性も重要視されなくてはならない。

〈マントラの固定〉

ヨーガ行者集団の中で魔術者、苦行者、瞑想家たちは或る種の力siddhi(目覚めつつある、ある状態vyutthānaにおける完成を意味する奇蹟的な力)を挙げているが、それを記したりグヴィダーナR̥gvidhānaは、とりわけ重要な全集と言える。ミルチャ・エリアーデ氏は自身の著書の中で、

『リグヴィダーナ』において知られているこれらのヨーガの実蹟はすべてすでに強く献信の色彩を帯びている。たとえヨーガ行者が目的一自己一をみること一を達成しなくても彼は献信(bhakti)を捨ててはならない、とこの文献は明言している。というのは、神は「神

自身を愛する者たちを愛する」からだ。ナーラーヤナは太陽盤の中心にある、と瞑想されることになっているが、このことはすでにタントラの図像学の「視覚化」を予示している。他の場所ではまた、ヴィシュヌは献信によってのみ到達され得る、と述べられている。これらより前の節では奉獻（プージャー pūjā）について述べられており、また「不滅のヴィシュヌ神」崇拝が詳細に述べられている。人は「自分自身の身体において、更に神々の身体において「真言（マントラ）の固定」（mantranyāsa）を行わねばならない²⁷⁾。

とし、自分自身の身体に対する『マントラの固定』の必要性を述べている。nyāsaとは置くこと、留めること、他につけること、の意味合いである。ここで述べるマントラの固定とは、マントラを唱えることで発生する音波の振動をチャクラに留め置いて、チャクラを共振させる行法のことである。

〈結語〉

ギザの大ピラミッドがカップル・オシレーター（＝パワー・プラネット）として作動する時、地球からのエネルギー（地球振動free oscillation of the earth＝地球の自由振動）を取り入れ、ピラミッドの各空間（部屋chamber）が共振することで、ピラミッド内部に電磁氣的エネルギーを蓄えることが出来る。一方、ハタ・ヨーガはアーサナによる修習で、身体内に同様なエネルギーを蓄積出来ると奨める。

ミルチャ・エリアーデは『ヨーガのアーサナ』について、以下のように記述している²⁸⁾。

アーサナは、インドの苦行にとって特徴的な技術である。それはウパニシャッドにおいて、更にはヴェーダ文献においてさえ見られるが、『マハーバーラタ』とプラーナ（古潭）においてより頻繁に言及されている。もちろん、アーサナがますます重要な役割を果たすようになるのはハタ・ヨーガの文献においてである。『ゲーランダ・サンヒター』Gheraṇḍa Saṃhitaは32種類のアーサナを述べている。例えば、瞑想の姿勢の中で最も容易で一般的な蓮華坐padmāsanaの姿勢をどのようにして取るかを次のように述べている。……中略……アーサナのリストと説明は、タントラおよびハタ・ヨーガのほとんどの論書にみられる。これらの瞑想の姿勢の目的は、常に同一であり、『幾組かの対立するものから生ずる支障を完全に破棄することdvandvānabhighātaである。

と解説している。

ハタ・ヨーガ修習abhyāsaは蓮華坐のアーサナによって決定的な役割を演ずるとしている。ギザ大ピラミッドと同様にアーサナの姿勢をとり、ピラミッドの形を保持（執持dhāraṇā）し、更にはマントラを唱えるとき、身体はパワー・プラネットとなり、地球からのエネルギーを身体内へと吸収することが出来る。その結果、ムーラーダーラ・チャクラ、スヴァディシュターナ・チャクラ、マニプーラ・チャクラ、アナーハタ・チャクラと共振し、いづれは身体中を振動vibrationの世界へと導くことになる。

ハタ・ヨーガにおける修習、苦行が地球とヨーガ行者yoginとを一体化するのである。一方、エネルギーを内在する地球とそのシステム（エネルギーの流れ）について、鳥海光弘氏は『地球システム科学』²⁹⁾の中で、

地球表層は太陽から光として莫大なエネルギーをもらい、それと同じだけのエネルギーを宇宙に赤外線として放出している。入る量と出る量と同じになる理由は、もしそうでなければ、地球表層が温まったり冷えたりするはずだからである。実際の地球表層はほぼ定常状態に保たれている。マントルから大気に放出される熱は、太陽からのエネルギーに比べて数千分の一で、地球表層にとっては無視出来るほど小さい。太陽からのエネルギーによって、大気や海洋の流れをはじめとして地球表層のさなざまの活動が支えられている。地球表層に太陽から光としてやってくるエネルギーは 1.8×10^{17} Wである。

と論説し、

地球は対流によって大きく地球表層、マントル、外核、内核に分けられる。地球表層には太陽から 1.8×10^{17} Wのエネルギーが流れ込み、それと同じだけのエネルギーを宇宙に放出している。マントルは地球表層に向かって 4.4×10^{13} W (Pollack et al.1993) のエネルギーが地球表層に流れ出している。内核から外核に向かっては 4.0×10^{10} W程度のエネルギーが流れ出している。

とも述べている。

アーサナの修習によって身体が地球からの振動エネルギーを吸収し共振することで、電磁気力electromagnetic force (電場、磁場の中の電荷・磁極・電流に作用する力)のエネルギーとして身体内に蓄積することが出来る。とりわけ根のチャクラであるムーラーダーラ・チャクラに電磁気力が蓄えられるとき、嘗ての弘法大師空海が成し遂げた如く至高の世界へと一歩進むことが出来る。何故なら、このチャクラの中にはタントラtantra (呪文・医術・妙薬・支配・織機・基礎・教義・教範・呪法などの意味)のヨーガあるいはハタ・ヨーガが修習の根本理念としてあるクンダリーニー (炎の蛇=シバ神Śivaの活動力であるシャクティ śakti) が眠っているからである。完成された完全な身体siddha-dehaのピラミッドの下で、クンダリーニーは地球からの電磁気力の共振エネルギーの影響を受け、その眠りから目覚めることになる。

注

- 1) 立川武蔵訳『エリアーデ著作集 第十卷ヨーガ2』(せりか書房、1987) 60-61頁
- 2) 佐保田鶴治『続・ヨーガ根本経典』(平河出出版、1999) 255頁
- 3) 立川武蔵訳『エリアーデ著作集 第十卷ヨーガ2』(せりか書房、1987) 66-67頁
- 4) 財団法人鈴木学術財団『漢訳対照梵和大辞典』講談社、1979
- 5) 立川武蔵訳『エリアーデ著作集 第十卷ヨーガ2』(せりか書房、1987) 66-67頁
- 6) 松山俊太郎訳『タントラ』(平凡社、1991) 4-58頁
- 7) 杉木恒彦『サンヴァラ系密教の諸相』(東信堂、2007) 11-12, 262頁
- 8) 佐和隆研『仏像図典』(吉川弘文館、1962) 144頁
- 9) 松山俊太郎訳『タントラ』(平凡社、1991) 57頁
- 10) 立川武蔵訳『エリアーデ著作集 第十卷ヨーガ2』(せりか書房、1987) 67頁
- 11) 佐保田鶴治『続・ヨーガ根本経典』(平河出出版、1999) 45-59頁
- 12) O.P.JAGGI「YOGIC AND TANTRIC MEDICINE」(RAM&SONS、1979)

- 13) 『広辞苑 第六版』(岩波書店、2008)
- 14) 吉村作治、栗本薫『ピラミッド・ミステリーを語る。ハイテクで知るピラミッド5000年の謎』(朝日出版、1987) 5-40, 126-135頁
- 15) 大森崇『大ピラミッドの謎』(学習研究社、1997) 50頁
- 16) 中村省三『トワイライトゾーン』(KKワールドフォトプレス、1988) 28-29頁
- 17) 『広辞苑 第六版』(岩波書店、2008)
- 18) 大森崇『大ピラミッドの謎』(学習研究社、1997) 45頁
- 19) 中村省三『トワイライトゾーン』(KKワールドフォトプレス、1988) 36頁
- 20) Christopher Dunn. 『The GIZA POWER PLANT』(Bear&Company、1998) 130, 147-148, 182頁
- 21) 物理学辞典編集委員会編『物理学辞典』(培風館、2002) 1206頁
- 22) 江馬一弘『Newton 別冊』(ニュープレス、2010) 78-87頁
- 23) ミルチャ・エリアーデ、立川武蔵『ヨーガ2』(せりか書房、1987) 60-63頁
- 24) 長有慶『密教の歴史』(平楽寺書店、2002) 171頁
- 25) 瀧藤尊照『ヨガ医学』(四天王寺国際仏教大学・短期大学部紀要第34号、1994) 2頁
- 26) 財団法人鈴木学術財団『漢訳対照梵和大辞典』講談社、1979
- 27) ミルチャ・エリアーデ、立川武蔵『ヨーガ1』(せりか書房、1987) 219-220頁
- 28) ミルチャ・エリアーデ、立川武蔵『ヨーガ1』(せりか書房、1987) 95-97頁
- 29) 鳥海光弘他『地球システム科学』(岩波書店、2010) 66-68頁